

芸術の秋、10月に入りパリ日本文化会館では間断なく事業が展開されました。本号ではそれらの事業からいくつか選んで報告させていただきます。

目次

1. ニュイ・ブランシュ公演「Mouvements croisés (交叉する動き)」 2
10月5日(土)、パリの各所で「ニュイ・ブランシュ(白夜)」と呼ばれる夜通しイベントが開催されました。当館はパリ15区唯一の「ニュイ・ブランシュ」会場に選定され、同区との共催でチェロの演奏と「コンパニーJCM」によるダンスの共演プログラム「交叉する動き」を実施しました。
2. 公演「お点前ちょうだいいたします」 3
10月9日(水)から12日(土)まで、4日間にわたり掲題の演劇公演を開催しました。平田オリザさんが主宰する劇団「青年団」の元俳優で脚本・演出家である高井浩子さんの意欲作で、茶道の師匠の5年忌を記念し、その弟子たちが師匠の娘を招待して茶会を開くという設定で、茶の湯の裏舞台を描いています。
3. 座談会「奇跡の海」 4
10月10日(木)、実際の海女さんたちの生活ぶりを描いたドキュメンタリー映画「奇跡の海」を上映した後、鳥羽市から来仏した大野愛子さんから4名の海女さんが参加して講演会とレセプションが行われました。映画監督のエルワン・ルソーさん、三重大学の塚本明教授、旅行ガイドで日本美術収集家のフランク・サドランさんが参加しました。観光誘致のため中村欣一郎鳥羽市長も来館しました。
4. 講演「森は海の恋人」 5
10月11日(金)、牡蠣の養殖家 島山重篤氏の著書『森は海の恋人』の仏訳本出版を機に、島山氏を追ったドキュメンタリー映画を上映。その後、風土学者オーギュスタン・ベルク氏の記念講演会を実施しました。
5. 映画「海難 1890」 6
10月15日(火)、1890年和歌山県沖で起きたトルコ船の海難事故で遭難した人々を日本の漁民が助けた話と1985年のイラン＝イラク戦争でイランに取り残された日本人をトルコの救援機が救出したという2つの実話をもとに制作された映画「海難 1890」の上映会をトルコ文化センターとの共催で実施しました。
6. 講演「侘び-寂び 引き算の美」 7
10月16日(水)、日本人でもなかなか説明するのが難しい「侘び-寂び」の美意識をフランソワーズ・モレシャンさんが豊富な映像と独特の語り口で分かりやすく解説しました。全日本洋舞協会会長の黒井治さんが能のデモンストレーションで協力しました。
7. 関西広域連合による観光誘致イベント 8
10月16日(水)、関西広域連合がパリ日本文化会館で観光誘致のイベントを開催しました。
8. ドビュッシーの生家での日本関連催し 8
10月18日(金)、サンジェルマン・アン・レイにある作曲家ドビュッシーの生家で、作曲家と縁の深い日本美術品展と琴の演奏会などが開催されました。当館は琴の演奏家を同市に紹介しました。
9. イスラエル・ガルバン+YCAM 新作ダンス公演「Israel & イスラエル」 9
10月24日(木)から26日(土)の3日間、スペイン生まれの世界的に著名なフラメンコ舞踊家イスラエル・ガルバンさんとメディア・テクノロジーを基軸に据えたアートセンターYCAM(山口情報芸術センター)の共同制作によって生まれたダンス公演を実施しました。

① ニュイ・ブランシュ公演「Mouvements croisés (交叉する動き)」

2019年10月5日(土)はパリ市各所で「ニュイ・ブランシュ(白夜)」と呼ばれる夜通しのイベントが開催されました。今年はパリ15区がパリ日本文化会館を区内唯一の「白夜」の会場に選定しました。当館は同区との共催で、クレール・オッペールさんによるチェロ演奏とジャン＝クロード・マリニャルさん振付のダンス集団による共演「Mouvements croisés (交叉する動き)」を現在開催中の「大岩オスカル」展示場内(日本式3階)で実施しました。第1部と第2部に分かれていましたが、筆者は第1部を鑑賞しました。

オッペールさんはパリ生まれで、1993年にモスクワのチャイコフスキー音楽学校を卒業後、フランス、イタリア、ドイツ、南アフリカ等の国際コンクールで入賞し、現在ロシアやフランスを中心にソリストとして活躍しています。また、ベルリン交響楽団にも招待されています。その他、彼女はツール大学医学部で音楽セラピストとしても活動しています。

マリニャルさんは独学のダンサーでもあり振付師でもあります。フランスにおけるヒップ・ダンスやジャズ・ロック・ダンスのパイオニア的存在で、ニューヨークのブロードウェイ・ダンスセンターやアルヴィン・アイラーダンスシアターなどで修行した後、フランスを初め各国で活動しています。ミュージカル「ヘア」のフランス・バージョンの振付やアレーヌやナンテールのフェスティバルにも参加しています。

今回はマリニャルさんの振付の下、人生を夢見る女性と彼女の世界へ入りたいと夢見る男性が交叉する動きの中から結ばれていく様子を、藤原亜美さんとリュック・マントロさんの男女のダンサーがチェロの音色に合わせて踊りました。演奏曲はバッハの「アリア」、ガーシュウインの「サマータイム」、グルックの「精霊の踊り」、ブリテンの「チェロ組曲第3番」、ラフマニノフの「ヴォカリーズ」に加え、日本の「さくらさくら」などでした。

当日は15区のフィリップ・グージョン区長ご夫妻も会場を訪れ第一部をご覧になりました。当館の開館時間を23時まで延長しての開業でしたが、「白夜」効果で「大岩オスカル」展には通常土曜日に迎える入場者数をはるかに上回る約750名の来場者がありました。



「大岩オスカル」展の会場で実施された「ニュイ・ブランシュ」公演

② 公演「お点前ちょうだいいたします」

10月9日(水)から12日(土)まで、4日間にわたりパリ日本文化会館の地下3階大ホールで「お点前ちょうだいいたします」と題する演劇公演が開催されました。本演劇は平田オリザさん主宰の劇団「青年団」の元俳優で脚本家兼演出家である高井浩子さんの意欲作で、茶道の師匠の5年忌を記念し、その弟子たちが師匠の娘を招待して茶会を開くという設定で展開します。本劇には、高井さんを筆頭に「わのわ(和の輪)」をコンセプトに活動している劇団「東京タンバリン」所属の長尾純子、萩原美智子、井上みなみ、木村梨恵子、遠藤弘章、鈴木恵(敬称略)が出演しました。

岡倉天心が『茶の本』で述べているように、日本の精神性を体現しているような茶の湯の世界を、日常的な世界に引き戻して、着物を着た茶人たちが欠伸をしたり、足を投げ出したり、忘れ物したり、といった喜劇を繰り広げます。茶道について予備知識のある観客に対しては「舞台裏覗き」的な展開の面白さがあることに加え、茶道を知らない観客に対しても、登場人物の一人に茶道初心者を経験することで、ストーリーを追いながら茶道について理解を深めることができるよう工夫を凝らしており、茶道の一端を初心者にも自然な形で親しみやすく示していました。

公演後、出演した俳優さんたちによってパリ在住の菓子職人・村田崇徳さんが本公演のために特別に創作したお菓子が抹茶とともに振舞われると、観客たちの顔に嬉しそうな表情が広がりました。劇中の人物と観客たちが一体となった瞬間でした。観客からは「観劇しながら、着物や茶道についての豆知識が学べる、一粒で二度おいしい舞台だな」「劇の中でお茶のいただき方を説明してもらったすぐ後にお茶が出てくるので、その場で実践できていいな」といった声が聞かれました。



「お点前ちょうだいいたします」のワンシーン (写真: MCJP)

③ 座談会「奇跡の海」

10月10日(木)、実際の海女たちの生活を描いたドキュメンタリー映画「奇跡の海」の抜粋を上映した後、鳥羽市から来仏した現役の海女・大野愛子さん、上記ドキュメンタリー映画の監督エルワン・ルソーさん、三重大学の塚本明教授、旅行ガイドで日本美術収集家のフランク・サドランさんが壇上に並んで海女について多角的な視点から論じ合いました。

同座談会終了後は地上階小ホールから日本式6階に場所を移してレセプションも行われました。今回の催しには鳥羽市への観光誘致のために来仏した中村欣一郎鳥羽市長をはじめ、同市観光協会の吉川勝也会長、寺田順三郎・野村徳正両副会長、大野さん以外の現役の海女さんである井村千春さん、中川早苗さん(母)、東出静香さん(娘)の3名も参加しました。

海女の大野さんは次のように語りました。「元々東京の写真家で鳥羽市出身ではないが、海にもぐることが好きで“田舎暮らし”に憧れていたところへ、鳥羽市の海女募集があり、応募して運よく採用されたのがきっかけで海女になった。海女は『万葉集』にも詠われているほどに古くからある職業で、その起源にも興味があった。アワビを獲る場合には10.6cm以上のサイズのものに限り、浜辺での漁場区域も決められている。1年10ヶ月、1日70分間2クール、1回につき40秒から50秒ぐらい素もぐりし、トラブルの際に戻れる余裕を残して潜水するのが不文律となっている。」(抜粋要旨)

塚本教授は補足して、「古くは男も海にもぐっていたが、船の発達に伴って、男は船に乗って遠くの沖合で漁をし、女は沿岸で漁をするようになった。また、宗教的な影響を受けずに女性が自然の中で自由に働けたことも海女という職業の誕生につながったのではないかと解説しました。

海女の自然に寄り添った生き方や「決して無理をしない、欲張らない」生き方は、環境破壊の進む現代社会を生きる私たちにとって、大いに考えさせられるところがありました。

ルソー監督は今回密着取材した海女の生活に触れて受けた感動を、サドラン氏は自ら収集した浮世絵に描かれた海女の歴史的考察をしながら鳥羽市の素晴らしさをアピールしました。

なお、上記ドキュメンタリー映画の完全版は11月8日16時半からarteで放映される予定とのことです。



座談会の模様(左から3番目がルソー監督、次いで大野さん、サドランさん、塚本教授)

④ 講演「森は海の恋人」

牡蠣の養殖家畠山重篤氏の著書『森は海の恋人』の仏訳本 « La forêt amante de la mer » が出版されたのを記念しての講演会を 10 月 11 日 (金) に実施しました。畠山氏を追ったドキュメンタリー映画「漁師と森」を上映後、風土学者であり同書の翻訳者でもあるオーギュスタン・ベルク氏が記念講演会を実施しました。

畠山氏は岩手県気仙沼湾における赤潮被害に直面し、その原因が同湾に流れ込む大川の上流にある山や森林にあることに着目しました。海と森が相互に生かしていること、多葉性樹木の植林が海の水をも豊かにすることに気づき、植林運動を始めたのです。その継続的な運動が赤潮被害を克服し、牡蠣の養殖を復活させることにつながりました。そして彼の活動がメッセージとなり、住民たちと気仙沼湾との新しい関係が築かれました。映画の中では畠山氏のそうした活動が描かれています。

畠山氏の『森は海の恋人』の紹介はオーギュスタン・ベルク氏が企画した本年 6 月 8 日 (土) のシンポジウム「自然は考えるか？」の延長線上にあるもので、人類とその風土の関係を取り壊すことは人類にとっても自然にとっても致命的である、という畠山氏の主張は、ベルク氏の訴えたいことと合致しているように思われます。



孫とともに牡蠣の状態を調べる畠山氏 (上映されたドキュメンタリー映画のワンシーン)

⑤ 映画「海難 1890」

1890年和歌山県沖で起きたトルコ船の海難事故で遭難した人々を日本の漁民が助けた話と1985年のイラン=イラク戦争でイランに取り残された日本人をトルコの救援機が救出したという2つの実話は、日本人とトルコ人の友情のシンボルとして語り伝えられています。

その実話をもとに制作された映画「海難 1890」の上映会を10月15日(火)にトルコ文化センターとの共催で実施しました。

上映会が始まると、1890年の出来事も1985年の出来事も、どちらも自分たちの生活を犠牲にしてでも他国の人々を救出しようとする崇高な動機で共通しており、非常に感動的な内容でしたので、会場のトルコ人もフランス人も日本人も多くの観客が上映中涙を流していました。それを裏付けるように、出口に並んで立っていたトルコ文化センターのアフメド・バクジャン館長と筆者にほとんどの観客たちがごく自然な形で次々に手を差し伸べて握手を求め、私たちにお礼を述べながら帰っていきました。筆者自身も胸にジーンとくるものがありました。

なお、観客の中には本映画撮影監督の永田鉄男さんとオスマン=トルコ帝国皇帝の子孫であるムラドさん、そして元駐トルコ フランス大使の姿もありました。



「海難 1890」上映前に同映画撮影監督の永田鉄男さんに記念品を贈るトルコ文化センターのバクジャン館長

⑥ 講演「侘び-寂び 引き算の美」

10月16日(水)、日本人でもなかなか説明するのが難しい「侘び-寂び」の美意識について、フランソワーズ・モレシャン・ナガタキさんが豊富な映像を使い分かりやすく解説しました。また、後段、全日本洋舞協会会長の黒井治さんによる能のデモンストレーションも行われました。

モレシャンさんは冒頭、「侘び」はフランス語で *une mélancolie intérieure* (内なるメランコリー) であり、「寂び」は *la fugacité de l'instant* (瞬時のはかなさ) であると定義しました。その上で、「侘び-寂び」とは生の基本原理であり、「引き算の美」ともいえる。すべては相対的なもので、永遠のものは無く、不可避なことの受容であり、時を越えたものである、と解説しました。

西洋の室内にはあるものすべてを飾る風習があるが、日本では茶室の床の間に見られるように“引き算の美”意識が働き、余分なものは置かない。町中の会話でも「どちらまで？」—「ちょっとそこまで。」—「どうぞ気をつけて行ってらっしゃい。」というように奥ゆかしさを旨としている。「幸福な簡素さ」とでも言えましょう。そのように例示しました。

さらに、表より内側を重視する硯箱の装飾、障子に映る影のように想像力にゆだねる美意識、楓賞田敬に見られる自然崇拜、秀吉と千利休の対比にみる美意識の違い、細川元首相の伊豆の家や兼六園の窓、等々を例にして「侘び-寂び」を説明しました。その間、モレシャンさんの独特の語り口とジェスチャーが満員の観客を魅了しました。

なお、本講演会は在フランス日本国大使館の主催・協力により当館で実施されました。



講演するモレシャンさん(右)と黒井さん(左)

⑦ 関西広域連合による観光誘致イベント

パリ日本文化会館では日本の地方の魅力紹介にも力を入れています。その一環として、10月16日(水)に関西広域連合に協力し、地上階で芸舞妓の踊りや宇治茶の振舞いなどを通じて、関西地域への観光誘致イベントを開催しました。



芸舞妓さんの踊りのワンシーン



全国茶生産団体連合会、京都府茶生産協議会 吉田利一会長(手前の輪の中央)による玉露の淹れ方デモンストレーション

⑧ ドビュッシーの生家での日本関連催し

また、パリ日本文化会館ではパリ市以外のフランスの地方との連携にも力を入れています。その一環で、当館は10月18日(金)にサンジェルマン・アン・レイ市にあるドビュッシーの生家で行われた同作曲家に縁の深い日本美術品展と琴の演奏会に協力しました。具体的には、同催事に対し、パリ日本文化会館で2004年、2007年などに演奏していただいたことのある日原史絵さんというパリ在住の琴奏者をはじめとした日本文化専門家を同市に紹介しました。18日当日は日原氏の独特の声音とともに琴で演奏した「荒城の月」などの日本の歌曲を45人ほどの招待客が聴き入りました。



ドビュッシーの家で琴を演奏する日原史絵さん

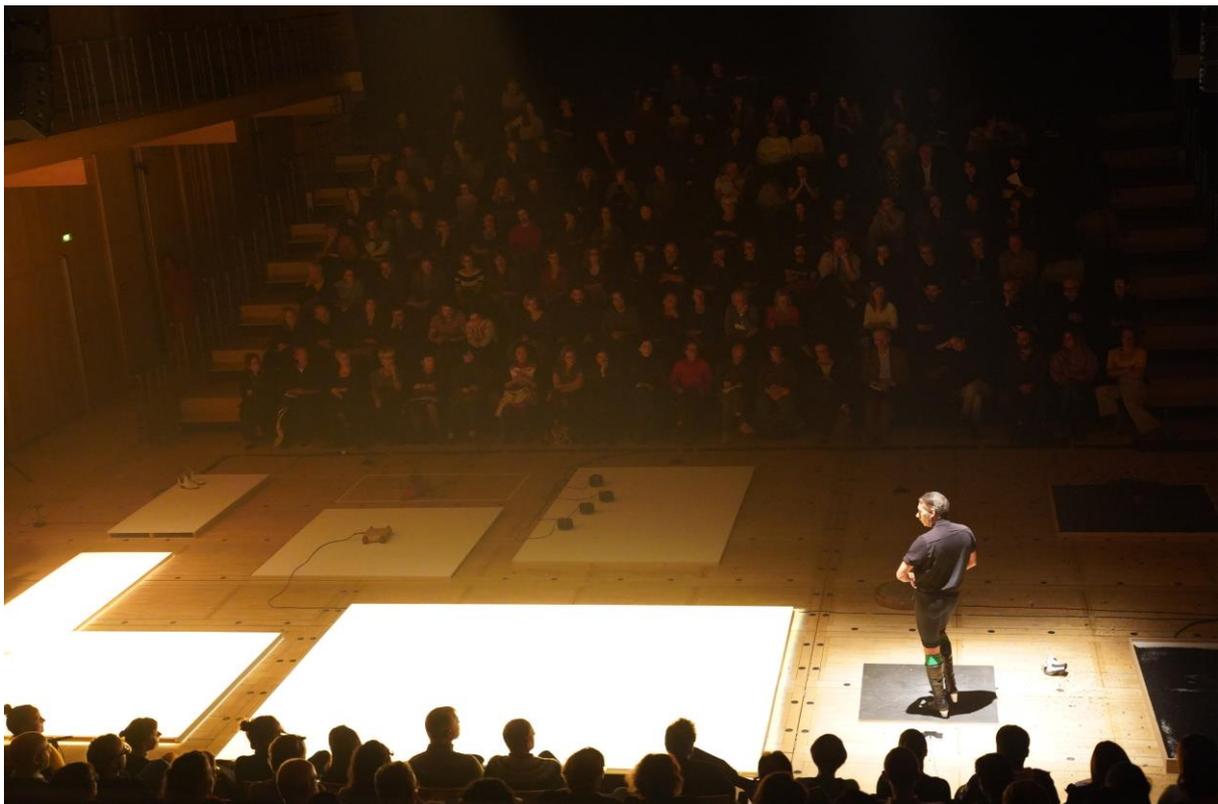
◎ イスラエル・ガルバン+YCAM 新作ダンス公演「Israel&イスラエル」

10月24日(木)から26日(土)の3日間、パリ/イル・ド・フランス国際デジタルアート・ビエンナーレ Biennale NémO 2019の一環として、スペイン生まれの世界的に著名なフラメンコ舞踊家イスラエル・ガルバンさんとメディア・テクノロジーを基軸に据えたアートセンターYCAM(山口情報芸術センター)の共同制作によって生まれたダンス公演が、パリ日本文化会館の地下3階大ホールで実施されました。

予期せぬ途絶あり、突然閃くインスピレーションありで、人間と機械の対話と共演がどこまで可能なのか、まさに実験的なパフォーマンスでした。

筆者はパリ日本文化会館の事業方針の3本柱の一つに「芸術と科学、芸術と先端技術の共鳴」を標榜していますが、本公演はまさにそれを体現したような事業でした。

本公演を拝見して筆者は、イスラエル・ガルバンの芸術性や技術に人工知能がまだ到底追いついていないとの率直な印象を覚えました。先端的、挑戦的取り組みの嚆矢として、後世、舞踊の歴史に刻まれる1ページとなったのではないかと思います。



イスラエル・ガルバン+YCAM 新作ダンス公演のワンシーン (写真: MCJP)

以上